

# 郷土はんのう



明治40年頃

飯能大通り

島田重利氏提供

## 飯能の俳句

吉良 蘇月

むさし野の空真青なる落葉かな

— 水原秋桜子 —

句碑観音寺境内

句集「葛飾」の中の名句

昭和四十九年十一月十日水原先生ご夫妻ご来駕の上句碑開き、名栗川清流の丘櫻林に囲まれ、秩父産紫雲石の色を鎮めた滑らかな巨石が香り豊かに据わっている。

文字も深く潤いがあっていかにもむさし野の飯能にふさわしい景色を展開している。

句碑の外にも名句がある。

秋晴や天覧山を聳えしむ

秋晴や釣橋かかる町の中

秋晴るる噴煙見れば見ゆるかな

蘭干すや窓なる谿は名栗川

万緑を顧るべし山毛榉峠 — 波郷

北川の金子茂氏所有地ぶな峠

である。石田波郷先生の自註に

「昭和十八年五月文学報国会職員ハイキングで奥武蔵に遊んだ、句中の峠の展望に魂を奪はれ即刻にこの句を爲した」有名な俳句であり、昭和五十年五月名栗産の紫雲石に自筆達筆の文字を彫み句碑が建てられた。

飯能市の  
板石塔婆  
(三)

新井清寿

飯能の板碑の偈について

なんの調査でも、現地調査となるといろいろな苦労が伴うと思います。

板碑の調査でも、この例にもれず、ある時山の中腹に墓地らしいものがあるので、よろこび勇んで、山を登り調査にとりかかったところ、いきなり墓地の持主があらわれて、

「お前たちは、誰の許可をもらって入ってきた。人の墓地に無断で入るのはどうほうとおんなじだ」ととなりつけられ、平身低頭したことや、また或る所で

は、この辺はまむしが多いから気をつけろといわれ、おそおそる手をさしだしたら、その岩の上に、太いまむしがとぐろをまいていて、肝をつぶしたことや、その外さまさまな苦勞を重ねながら調査を続けたのは、一つには新しいものを発見するよるこびがあり、一つには資料の少ない中世史を知る上に、板碑は貴重な資料であると言われている

ので、この資料から飯能の中世の様子を少しでも分ればという希望があったからです。

こうして一応調査が終ったので集めた資料を、主尊別・造立者別・造立年月別・地域別に分けてみたところ、主尊別では弥陀一尊及び弥陀三尊が最も多く外に釈迦一尊や金剛界大日そのほかがあることなど

造立者別では、年代がくだるにしたがつて庶民化するとともに女性の造立者が多くなったことなど

地域別では、丹党一族との関連の深い所と思われる所に大型の板碑が多いなど生きた中世の姿の一端がここに伺われるのです。そこで今回は別の角度からの考察をする装飾・偈、その他がありここでは偈についてまとめてみます、偈は仏教の教典の一部を詩の形であらわしたもので、仏の功德をたたえ、人の道をさとしたものと言われている

ますので、これから私たちの祖先がどのような考えをしたかわかると思われます。

飯能の板碑では、九種類ほどの偈が読みとれました。その中でも一番多いのが、光明真言の偈で、これが二十三基程あります。

光明遍照

十方世界

念仏衆生

攝取不捨

の偈文の意味することは、この偈を唱えることよって、十の悪、五の返逆、四重の苦しみ一切の罪障も消えて、極楽浄土へおもむくことができるという意味だといわれます。

次に能仁寺と岩本家にある板碑には、有名ないろは歌のもととなったと言われる。諸行無常の偈の刻まれたものがあります

諸行無常

是生滅法

生滅滅已

寂滅為樂

また阿弥陀信仰の根本念仏である一念弥陀仏の偈が刻まれた

ものが二基あります。

一念弥陀仏

即滅無量罪

現受無比樂

後生清浄土

とあり、この念仏を唱えることよって、すべての罪が減して比樂の極楽往生が得られるという意味のものだといわれます。さらに原市場西光寺にある板碑には、

若以色見我

以音声求我

是人行邪道

不能見如来

という偈文が刻まれています。これは人は見かけの美しさだけを求めるのはまちがいで、真実の自己を求めることが大切であるというような意味です。さらに心応寺(原町)と願成

寺(川寺)には

応無所住

而生其心

と刻まれた板碑がそれぞれ一基ずつありますが、この偈文は金剛經の一節で、まさに住むところをなくして、はじめて其の心を知ることができるとい意味の偈文です。

もうひとつは、つぎのような偈がきざまれた板碑が長念寺に(東吾野)一基あります。

一見卒塔婆

永離三惡道

何況造立者

必生安樂國

これは卒塔婆を建てる功德をいたもので、卒塔婆は見るだけでも、目・耳・口の悪から永久にのがれることができる。まして卒塔婆を建てた者は、一生



智観寺 永仁六年(一一二九)

安楽に暮らせるという意味です  
ので、当時の人々の考え方がし  
のべれます。

同じく長念寺には、

願以此功德

普及於一切

我等与衆生

皆共成仏道

と刻まれたものもあります。こ

のほか、飯能市で認められた偈

には次のようなものがあります。

其者衆生

過斯光者

三垢消滅

身意柔順

ともう一つは

一切有爲法

如夢幻泡影

如露亦水電

応作如是観

と刻まれた偈があります。

以上九種類の偈が飯能市内の

板碑ではみられます。このよう

な偈が、刻まれるようになった

のは、多くは南北朝以降の板碑

になりますが、最も古いのは、

阿須の山崎家の墓地にある、永

仁四年（一二九六）のもので、

光明真言が刻まれています。

そのほかのものは、南北朝以

降に建てられた、板碑に多く見

られることは、戦乱時代の人々

と深いかわりあいがあるので  
はななかりかと思われれます。



能仁寺 応安三年（一三七〇）



長念寺 延文三年（一三五八）



西光寺 正和元年（一三二二）



心応寺 文明四年（一四七二）

(参考) 願文

1 如我昔祈願 相迎三十三ヶ年 今者已満足忌影一

比一切衆生 而右卒都姿 皆合入仏道 一本奉造立處也

2 右意趣者 為逆修善根 造立塔婆伏願四部結衆

三十七人現世安穩後生 善處法界含靈同円禪智



## 久留里城訪問記

西野長治

加治郷土資料同好会では、恒例の研修旅行を三月七・八日にマイクロバス一台、参加者二十三名で実施した。名栗の山々にもいつになく残雪の多い早春であった。

第一日は千葉市の加曾利貝塚と同博物館をみて上総久留里城址を見学したのち外房千倉温泉に泊り、翌日フェリーで三浦半島を通り厚木経由で帰飯した。以下は久留里に関する報告である。

久留里は、丹党中山氏（飯能中山在住）から出た黒田氏が、江戸時代に九代百三十年間にわたって居城とし、同藩によって

この飯能地方も領有されていたので、この地方とは深い縁があり、親しみを感じていたものである。

飯能から団体で久留里を訪ねたのはこれが最初であるというのも意外であったが、温い歓迎を受けたことが更に印象を深いものにした。

○久留里の街から城址へ

久留里は、房総半島内陸の中央にある町で、奥上総地方の経済文化の中心地でもあり、現在は君津市に含まれるか、素朴な城下町の面影が残るこじんまりした町で目抜通りの商店街も活気があった。

久留里へは木更津から国鉄久留里線（駅十ヶ所、二二・六キロ）利用が、車では姉ヶ崎から鴨川道路を進むのが近い。

小櫃川沿いの平野には豊かな水田や畑が拓け、更に百米から百五十米の山なみが周囲に連なる。山は高くないが浸触による凝灰石質の断崖絶壁が峻嶒な地形をつくっている所も多い。その一つである城山一帯が久留里城址である。

久留里の城下町を過ぎると「城山公園」への標識があり、左折すると急な山路に入る。やがて小さなトンネルを抜け久留里城二の丸下の駐車場に着く。

この売店の包装紙に丹党の紋所「榊井に月」のデザインがあるのがまず目についてうれしかった。

○二の丸と久留里城址資料館

城山の中段にある二の丸（標高百十七米）に着く。大型車以外ならここまで自動車が入る。断崖上の二の丸はさほど広くはないが、鉄砲狭間のある白壁の土壁で固め、ありし日の名城の

姿を偲ばせる。この中に資料館が建てられている。

大島副主査はじめ職員の家内で会議室へ。

「飯能の皆さんは他人とは思えません」と親しみをこめた歓迎の言葉にまず感激した。それから久留里の歴史、黒田氏の治政の概略などを聞いた。「黒田氏は領民にとってありがたい領主であった」ことが古文書からも実証されるといふ説明に私たちは心安らく思いがしたのであった。

資料館は、久留里城天主閣（写真）とともに昭和五十四年八月に、工費二億円をかけて竣工したもので、今では観光の名所になっている。

展示室には、室町戦国時代に覇を競った武将、武田、里見氏をはじめ、黒田氏入国前の大須賀、土屋氏の諸大名の関係資料も順序よく陳列されており、早くから開けた地であることを示す出土品などもある。殊に、黒田家の当主から寄託されたという家系図、築城資料、文書類、歴代藩主の遺愛品、丹党関係資料には目をひくものが多かった。

また、城址発掘調査によって出土した天主閣の鯨や、黒田家

紋瓦など築城当時の遺物や遺構の様子も展示されている。

○本丸と天主閣

二の丸資料館から百五十米ほどの所に城山の頂（標高百三十七米）に久留里城本丸がある。ここに再建した二層三階建ての白壁の天主閣が聳え城の歴史を象徴しているかのようである。

二の丸から仰ぐ天主も美しい。天主への登城の路の傍らに湧井が二ヶ所あり、きれいな水を今もたたえている。天嶮の要害に加え飲料水が十分なことなど綿密な築城設計である。

天主からは三六〇度の展望がほしいままにできる。將軍吉宗が譜代大名黒田直純に五千両を与え寛保二年（一八一〇）久留里築城を命じたのも房総防備の要であったことを物語っている。再建された天主閣は当時の場所のすぐ隣りであるが、当時の遺構を示す礎石群は調査された上現在では埋め戻され、完全保存がはかられている。

久留里城はこのほか山麓の小櫃川畔の段丘上に三の丸と外曲輪、外堀など大きな遺構があり空堀や多くの曲輪、物見台などの防衛設備が施されていたことも判明している。







## 振武軍の跡をたずねて

加藤

一

浪沢成一郎一派は上野の山において、官軍と戦うことの不利を唱えていたが、彰義隊幹部から除外されたのを機に、密かに彰義隊を脱退、振武軍結成を計画し、気脈を通ずる仲間を誘っていた。慶応四年四月十一日の夜半、同志は上野の周囲の板塀を乗り越え、無事脱出し本郷の附木屋に住んでいた同盟者の野村良造方に集合し、官軍に抗することを相談し、一つは会津に行つて援助をし、一方は近郊に至つて多くの味方を得て官軍に抗しようということに意見がわかれたが、後者に決し、四谷新宿より二里余(約七キロ)ある堀の内(現杉並区)の茶漬茶屋信業に集まる、ここに於て二十人が振武軍を編成するものになつたということである。

筆者は本年三月十二日(木)ここを訪れた。中野駅より繁華街を南へ、青梅街道に突き当たつて西に向かいしばらくして小社がある、その信号を渡り約二百メートル南に女子美術大学がある。その北側の一画に約一ヘク

タールの土地があったという、ここが信業の跡(現杉並区和田一の六六)峰島邸があり、他に区立保育園、私立東京文化学園の附属幼稚園、小学校その他二三の私宅が建っている。近くの花屋のご夫妻の好意によつて横尾さんという八十才位の老夫人を訪ねた。現吾野中学校長横尾秀二郎氏の親戚)偶然が幸わいし、五六十年昔の話をきくことができた。それによると庭には古木が繁り瀧のある池もあつたとのこと、今は当時を偲ぶようですがもない。

これより先二月七日(土)に田無市を訪れる。閏四月十九日「八員日」に加わるをもつて、この日三里程(約一〇・五キロ)西に当る田無村(現田無市)というところへ赴く、当地において隊号を振武軍と名づけ隊中の役員をさだめた「先ず振武軍をいろいろと世話をしたという、当時の名主下田半兵衛富宅さんの家(田無市本町二丁目十番八号)を訪ねる。北側の通りは不動産業をしている主人の事務所で

南側が茅葺屋根の大きな建物があつた、かつての名主家の貫録ある建築で、塀の南側の広場は貸車場となつている。当家は古くからの素封家で、広場の隅には市指定文化財の稗倉と、養老田碑がある。下田邸を辞して、斜めに向かい合いの通りを南にいくと真言宗智山派の田無山総持寺がある。ここは慶応年間には西光寺といつていた。更に南へ二百メートルばかり行くと蜜蔵院(現市役所)があつた。この二ヶ寺が振武軍の屯所だつたという、明治八年に蜜蔵院は廃寺となり西光寺に吸収合併され、名も総持寺となつたという。この寺は名刹で門を入ると広い庭を隔てて正面に本堂、向つて右側が近代的な庫裏と鐘楼、左側には下田半兵衛富宅(代々襲名)の木像を安置した妙見堂がある、梅の花のほころび始めた裏の墓地には下田家の立派な墓地もある。

三月十六日(月)瑞穂町の役場を訪問する。町史の一節に振武軍関係について次のよう

る、箱根ヶ崎関谷久太郎氏が狭山三十五号に発表の指田日記中箱根ヶ崎の事どもの中より次のように載せている。土地の者はその隊を「脱走」と呼んだ、仁義隊(振武軍か)の本部は私の本家で元旅館の関谷に置き隊員は円福寺に滞在して江戸府内の状況を探り待機していた。指田日記にもあるとおり、その頃は連日の大雨で村内も殺気だち物情騒然としたろうが、隊員は秩序が保たれ乱暴狼籍はやらなかつたようだ。隊員が時の茶屋旅館根岸屋(現関根菓子店)で女中のことから、その主人と論争が起り、ただではおさまらまいと思つたが、出発の際隊列から鉄砲を二、三発根岸屋店先へ打ち込んで通つたということである。慶応四年五月十四日「田無村を發し箱根ヶ崎に至る」振武軍が田無から箱根ヶ崎へ移動した翌日の五月十五日早晩上野の彰義隊は官軍の総攻撃をうけて僅か一日で潰滅した。十四日夜半振武軍は支度をして田無に向かい、下田半兵衛宅で昼食をとり四谷新宿へ向かう。途中彰義隊の落人にあい午後二時頃、遂に彰義隊は瓦解したことを聞いて、田無村に引き上げ、名主半兵衛

方及び前記二ヶ寺に一泊した。青梅市史によると、西分村の名主浜中良亮と黒沢村の名主柳内才次郎が代表として、箱根ヶ崎に呼びだされ、御嶽山に立てこもろうとしたが断つたので振武軍は飯能に案内を命じた。これによると振武軍は箱根ヶ崎―黒須―飯能のコースを辿つたことになるが一書には田無―所沢―黒須―飯能ともあるが今後の研究にまつ。

参考文献 高岡槍太郎日誌

青梅市史

瑞穂町史



田無山 総持寺 本堂

飯能郷土史研究会会則(抄)

- 第一条 この会は飯能郷土史研究会と称し、事務所を飯能市中央公民館内におく
第二条 この会は、郷土の歴史を研究し、市民文化の進展に寄与することを目的とする。
第三条 この会は前条の目的を達成するために次の事業を行なう。
1 郷土史の調査研究
2 講演会、展示会等の開催及び出版物の刊行
3 その他、目的達成に必要な事項
第四条 この会は、会の趣旨に賛同する会員をもって構成する。
第五条 この会に次の役員をおく。
会長一名、副会長二名、理事若干名、監事二名、幹事若干名、
2 役員任期は二年とする。
但し、再任することができる
補欠の役員任期は、前任者の残任期間とする。
3 この会に顧問をおくことができる。
第六条 役員選出は次のとお

りとする。
理事は会員中より選出し、総会において承認をうける。
会長、副会長は理事の互選により選出し、総会において承認をうける。

監事は、総会において選出する。
幹事は会長が委嘱する。
顧問は、理事会の承認をうけて会長が委嘱する。

第八条 この会の会議をわけて総会、理事会とする。
2 総会は毎年一回開催し、事業計画、予算及び決算を審議する。

第九条 この会の経費は、会費補助金及びその他の収入をもつてこれにあてる。
2 会費は年額千円とする。

役員名簿

Table with 3 columns: Name, Position, and Number. Includes members like 加藤一 (会長), 双木利夫 (副会長), 新井清寿 (理事), etc.

平沼恒夫 二一五九〇九
堀内新作 二一五六二四
中村好男 二区

野口正元 二一四四〇一
小谷野寛一 二一六〇〇〇
加治

西野長治 二一三三六〇
小山誠三 三一三四一二
志茂道一 二一二五一八
精明

島田欽一 二一四三三六
松野勝治 三一三〇六二
南高麗

内野久喜 二一四四八九
原市場

倉掛一男 七一〇一〇八
本橋幹治 七一〇一四〇
西村一男 七〇二二一七
東吾野

井上峰次 八一二〇一九
蘭幕兼吉 八一〇二二二
吾野

清原恒雄 八一〇一三二
横田稻吉 八一〇一六

吉良憲夫 三一四〇七〇
山岸雄司 二一四四八〇

赤田健一 二一七三二七
浅見徳男 八一六〇九

岡野達雄 三一三三五

飯能郷土史かるた

制作についてお願い

本会本年度の事業として会員の手で「かるた」を作ることになりました。

日々移りゆく世相の中で子どもたちが、家族や友だちとの遊びの中から、郷土に親しみを感じ、郷土の歴史を識ることに役立てようとするものです。

次の要領によりふるってご応募ください。

一、内容〇いろは四十八文字をそれぞれ頭文字とした言葉(句)

〇原則として五七五調とし、平易な口語をつかいます。

〇飯能の郷土史(昭和初期以前)に関係ある出来事、地誌習俗を素材にしてください。
二、応募資格 本会会員、加治精明、原市場の郷土研究会の会員とします。
三、応募点数 一人一文字について一句、幾文字について応募しても結構です。
応募は所定の用紙を用いてく

ださい。

四、締切り 昭和五十六年六月末日までに事務所または本会理事まで届けてください。

五、審査 本会審査委員が審査し一文字について一点を入选作とし、入選者には記念品を贈ります。

六、著作権 著作権は本会に属します。原稿は返却しません。

七、絵札 三枝守彦画伯に制作を依頼します。(中藤在住)

八、頒布 製品は市販しますが本会会員には特別価格で頒布します。

作例
①いかだ宿軒を連ねた川原町
②平安のいらかゆかしい福徳寺
③テト馬車は名栗谷から吾野から



# 図書紹介

## 飯能市史資料編III—教育

野口正元著

明治五年八月に学制が公布されてから、教育は学校教育が中心となった。本書も寺子屋の時代から筆をはじめ、飯能市における学校教育が中心となつて編集されている。

明治・大正・昭和と変遷を追い、その時どきの資料を載せている。また、エピソードなども「余録」欄で紹介し、教育という堅いテーマであるが、市民の愛読書となるように、読みやすく解説がほどこされている。  
(B5版二六四頁頒価千円)

## 飯能市史資料編IV—行政(一)

新井 清寿  
大久保鉄雄 著

江戸時代五十五の独立した村として散在していた飯能市域、これらの村々が合併や分村を経て、今日に至つた経過を、多くの資料をもとに解説が加えられている。そのほか財政、税・戸籍など市民生活に直接かかわりをもち、共に築いてきた道程

を編年的にまとめている。

また、この編は行政の一部で行政(二)の発刊で完結の予定である。ただし、飯能市成長の記録とよぶべき書であろうか。  
(B5版二六五頁頒価千円)

## 民俗茶ばなし

小谷野寛一著

はんのう文庫第二集として発行された。永く教職にあり、現在も文化活動の第一線で指導を続けている著者が、この地方に古くから伝わり、人々の生活にさまざまな潤いを与えてきた習俗をまとめて解説した書である。内容は、年中行事、民家、食べもの、衣料から信仰、子どもの遊びにいたるまで、自ら足で調査したもので、「茶ばなし」と名づけたように、気負わず一般向きにわかりやすく、著者独自の軽妙な筆致で綴られており、読み物としても楽しい。  
(B5版二五五頁千二百円)

## 飯能の灯籠絵

小槻正信著

飯能地方の祭礼の時、参道を飾つた紙灯籠絵、いわゆる地口あんどんの肉筆画集である。最近この習俗がすたれてきた

ので保存を望む声が強く、絵馬

師小槻正信氏に依頼し、小川特製の和紙に三十三葉を描き、和綴じ仕上げをしたものである。絵と地口のコンビネーションがおもしろく、貴重な資料である。  
(本会刊 B4版箱入り)

## 歌集 水晶の馬

綾部光芳著

飯能在住の歌人の第一歌集である。著者は作風短歌会に属する中堅作家であるが、むしろ歌壇の新進として注目される新鮮な作風をもっている。そのデリケートな神経から噴出する幻をみるような詩は、読む人に不思議な感動を与えずにはおかない。  
○薬ゆび浸せる沼のみづすまし  
逃げゆく波紋風動く森  
○たちならぶ青き秀かな山よりの風に怯えてみるやうな葱  
○終列車も翔びゆく鳥もひたすらにしろがねの森を目指してゆけり  
(B5版二五五頁千二百円)

沖積社刊

# 市史編さん室

## だより

市制二十周年の記念事業として、市史編さんがはじまつてから、七年の歳月が過ぎました。まだ、完成までには遠い道程が残されており、これからも多くの時日を要することと思われ

ます。  
この七年の間、多くの皆さんのご協力により、資料編のうち「文化財」「飯能の自然—植物」「教育」「行政(一)」の四冊を刊行することができました。

また資料収集の面では、文書類だけに限ると調査の済んだ所蔵家数は七十四軒をかぞえ、調べた文書一万二千点、その中複写をして市史編さん室に整理保管されているものは約六千五百点余の多きにのほります。

これまでで主な家々の調査は大方済み、これからの収集は目的別に特定なものを収集する段階に至つたと考えております。今後より多くの方にご協力をいただくのはもちろんですが、とくに本会会員の皆さんには、一層のお力添えをいただきますようお願いいたします。

(浅見記)

# 編集後記

本会の会員がそれぞれの分野で多忙をきわめ、成果を上げておられるので、会そのものの事業が影響を受ける結果になってしまいました。それだけに、郷土出版は、まさに花ざかりの感があります。

表紙の写真は、明治末期の大通り風景、島田重利氏の提供です。店先にランプが吊られ、当時珍しかった金平糖の看板?がみえます。

新井氏の板碑研究、加藤氏の飯能戦争のルーツ研究、山岸氏の俚謡研究もそれぞれ永い歴史をもち、西野氏の久留里城訪問記は今後の郷土史に新しい分野がひらかれる第一頁になりそうです。感謝いたします(A)

郷土はんのう 第三号

発行所 飯能郷土史研究会

飯能市飯能六〇

飯能市中央公民館内

代表 加藤 一

印刷所 コバヤシ印刷

飯能市大河原一八七

☎ 三二七五三九